

ガブリエル・マルセルと存在の神秘

和田 渡

一九七〇年代に勢いを増した構造主義の潮流に飲みこまれて、それまでの勢いを失った実存主義ではあるが、今日でもメルロ＝ポンティ、サルトルの哲学に関しては論じられることが少なくない。しかし、存在と所有、身体、我と汝、受肉、状況などについて思索したガブリエル・マルセルや、実存と超越、内面性、形而上学的経験などを主題化したジャン・ヴァールといった実存主義的な思索を展開した人物となると、今日の日本では顧みられることはほとんどない。実存あるいは実存主義といった言葉そのものも、今日では若干の例外はあるものの、ほとんど耳にすることはない。マルセルに関して言えば、現象学運動を論じた書物で扱われることもあるが、スピーゲルバーグを除けば^①、概して副次的な扱いでしかない。^② 人間の主体性を擁護した実存思想は、主体よりもむしろ構造の優位を強調した思想の影に隠れてしまったかのように見える。

マルセルがその思索のなかで一貫して強調した「神秘、秘儀 (mystère)」という言葉となると、現在の日本で関心を示す人はほとんどいないだろう。目に見えるもの、手にいれられるもの(所

有物)を欲望し、時に過剰なまでに消費へと駆りたてられる多くの人に、神秘などという、うさんくさい言葉が入りこむ余地はない。とはいえ、現実の生活には何の有効性も持たないように見える次元の事柄にこだわり、考え続ける試みが全く無効と切り切ることとはできない。その試みを通じて垣間見られる次元が、物質的な欲望の過剰に遮られた生の相貌に異なる表情を当てることもありうるからである。

本稿は、マルセル哲学の鍵概念のひとつである「神秘」に注目し、それが示唆する次元を考察することを通じて、マルセルの哲学の現在の意味をさぐることである。Ⅰでは、マルセイユにおける講演「存在論的神秘の定立とそれへの具体的接近」(一九三三年一月二十一日)前に書かれた日記に焦点をあてて考察し、Ⅱではその講演内容に即して神秘について検討してみた。Ⅲでは、神秘との出会い、神秘の確認へと導く「潜心、沈潜 (recueillement)」の働きに焦点を定め、潜心によって開示される神秘の宗教的次元の持つ意味を明らかにしたい。以上の考察を通じて、神秘経験に力点を置いたマルセル哲学の意義を考

えてみたい。

I 問題と神秘—講演以前の日記に即して—

問題と神秘という対比の下になされる思索は、マルセルの実存観をつかみ出すのに有効である。この思索の源泉は、「形而上学日記」(一九二八—一九三三)の一九三二年十月二十二日の日記に認められる。この日付になる日記は、マルセイユでの講演に対する構想を書き留めたものであり、この日以降、問題と神秘をめぐっての思索が繰り返される。そのなかで、「両者の区別が明確にされる。前者は日常の経験においてわれわれが動くはずのもの、われわれの道を遮るものであり、「私の前に*devant moi*」置かれたものである。マルセルの意図は明らかである。すなわち、彼が強調する私の前にある問題とは、どのような性質のものである、私がいかに目にするのであり、私がいかに距離をとって見ることのできるものであり、場合によっては回避することのできるものである。問題とは、私がいかに対象化して把握したり、その周辺を回って詳細に吟味したり、細分化したりすることのできるものである。その場合に、問題を取り扱う「私」の存在をも疑問視する哲学と違って、多くの学問は、問題をめぐる考察に専念する。問題とは、離れた場所、外側からの検討を可能にし、一定の距離を前提にするものだというマルセルの定義には、分かりにくい点はない。

ところが、神秘となると事情は単純ではない。神秘という言葉で言い表される事態が正確に把握されなければならない。マルセルによれば、神秘とは、私と私がかかわりを持つものとの間で生じるものである。関与する、かかわり(participation)を持つとは、私の前に対象化できるものとしてまるごと存在しているものとの関係を意味するものではない。かかわりにおいては、しばしば私と私がかかわりを持つものとの距離が見定めがたいものになる。それは、私がいかに問題として対象化できないような状況に巻きこまれることを意味している。関与においてはまた、主体の能動性、自発性を制限したり、脅かしたりする要因が生じてくるのであり、主体は問題を扱う場合のように自由に振舞うことができない。関与するという場合には、状況に巻きこまれた私に何が起きているのかを对象的に把握することはできないのだ。ある状況のなかで起きる出来事は、その外側に立つた観察を許さない。そうした出来事には、くまなく見通すことのできない不可思議さが潜んでいる。それこそが、マルセルが神秘と名づけるものである。神秘は、問題とは異なり、私の目から隠されている側面を多く含む状況のなかで直に生きられるものである。ある状況のなかで存在するということは、われわれが目目の前で見える事物だけでなく、背後や側面の見えていない事物に取り囲まれ、一人、あるいは二人、あるいは複数の人々と共に在って、何らかの仕方で交流が生きられている場面に他ならない。こうした場面は、再度繰り返さなければ、われわれ

れが事物や人間との交流に包みこまれていく状況であり、それがある一点から見渡すことはできないのだ。その状況では、そのつど確かに何か起きてきているが、それがどのような出来事であるのかを冷静に把握することは難しいのである。後になつて振り返りかえり、起きた出来事的一端を明らかにすることはできても、大半は理解されないままに埋もれていくのである。「汲みつくることができない」ということの原理としての存在⁵⁾という言い方は、状況のなかに巻きこまれた人間の存在がきわめて多面的な仕方で生きられており、問題のように対象化して整理できる性質を持たないことを示している。

マルセルが中心概念として多用する「存在」は、名詞形としてではなく、動詞形として捉え、「存在しつづけること」「生き在りつづけること」と理解すべきである。この状態を、ジャン・ヴァールが好んだ経験という言葉で言い換えることも可能であろう。あるいは、ジャンケレヴィッチが強調した「生成」と重ね合わせることもできるだろう。マルセルは、同年十一月八日の日記で、「人間的経験にその存在論的な重みを取り戻す必要性⁶⁾」と記し、翌日には、その意味を掘り下げていくことを自分に課している。マルセルの後の思索は、文字通り、人間的経験の具体的な諸相に眼差しを向け、人間が経験する心理的現実や、相互主体的出会いの現実を豊かに記述していく歩みであり、「具体的哲学」の実現を目指す道行きであった。その歩みのなかで、経験を生きる主体としての私、私とかかわりを持つあなた、「私

は身体を持つ」から「私は身体である」への移行、経験の源泉としての「感じる」といった問題群が徐々に、具体的な場面の記述とともに掘り下げられていくことになる。

「存在すること」「生きて経験すること」は、われわれが特定の状況に巻きこまれていくなかで生起するそのつど一回限りの出来事であり、それを上空から俯瞰することはできない。この出来事の只中で不偏不党の主体として振舞うことも許されない。そこでは、ジャンケレヴィッチがしばしば語った「なんだか分からないもの」⁷⁾がつかの間現れて、ただちに去っていく。こうした瞬時にその表情を変える出来事の細部をつかまえることは不可能である。しかし、われわれの生の大半がこうしたよく分からないままに経過する出来事によって占められているとすると、生きていることには常にある種の得体の知れなさ、不可思議さが含みこまれていいると見なさざるをえない。マルセルが神秘と名づけたものは、生のなかに潜む分からなさである。同年の十二月二十三日の日記でマルセルは、今述べた、状況に巻きこまれていく私の存在が何かという問題に関連づけて、私の存在に関する問題は、それを問題にする主体自身の内へと深まっていき、その限りで、その問題は問題としては否定されて、神秘に変貌すると述べている⁸⁾。すなわち、ある状況に巻きこまれた私の存在に関する問題は、私の眼前に立ち現れる性質のものではなく、問う私を巻きこんでしまうような性質のものであり、明確な答えなど期待できないということである。マルセルにとつ

て、答えが出せるものは問題の次元に属し、一義的な解答が出ないものは神秘に属している。その神秘に迫るためには、前方へと向かう視線を遮断し、私の視線を私自身へと向け変え、私の内部へと潜行し、私に決して現前することのない背後も含む現実的な状況を思い観る操作が必要である。この操作は、可視的な対象を扱う技術的な操作とは一線を画す。「神秘は、定義上、考えられる一切の技術を超越している。」⁵⁾

マルセルによれば、神秘を認めることは、精神のとりわけ積極的な働きである。この働きは、通常は自覚されないものの、経験の諸相に自己を反映させ、光を投げかけている生の出来事の諸相を土台にしてなされる反省的直観 (intuition) のありようを照射する、あるいは反省する。⁶⁾ この反省の課題は、気づかれないうままに遂行され、気づかれないうままに失われていく生の諸相を生き生きとよみがえらせることであり、その種によみがえらせを可能にするのが、マルセルの言う「潜在」である。おそらく、「潜在」という今日ではほとんど耳にすることのない術語こそが、マルセル哲学の鍵となる。潜在については講演のなかで詳しく語られるので、章を改めて検討したい。

II 問題と神秘—講演に即して—

「存在論的神秘の定立とそれへの具体的接近」というマルセイユ講演は、マルセルの思索の核心を示すものである。マルセ

ルは、この講演の冒頭でタイトルとして選ばれた「存在論的神秘」という言い方が曲解されかねない危険を恐れて、それがメーテルリンク的な神秘説や、心霊論や啓示された神秘 (mysteries reveals) とは異なることに注意を促している。さらに、「存在論的神秘」こそが、『形而上学日記』の哲学的、精神的な展開全体の結果であると誇らしげに宣言している。その後、「存在論的神秘」に関する具体的な思索が続いている。

マルセルの出発点は、同時代人が存在論的センス(感覚、意味、方向)、存在のセンスを喪失しているという診断である。すなわち、彼が観察した人間は、生きている、存在しているという感覚や、生きている意味、生きる方向を見失った状態にある。自分が自分であることに実感が持たず、生きているという事実の重みに触れることもなく、言わば表層的に存在している人間が意識されていると言える。マルセルは、そうした人間が、生命的機能と社会的機能の二重の意味を含む「諸機能の束」¹⁾ にすぎなくなっていると指摘し、後者については、「消費者としての機能、生産者としての機能、市民としての機能」²⁾ の三つを挙げている。一九三〇年代の人間観察にもとづくこの指摘は、六十年代後半に行われたリクールとの対話のなかでも繰り返されているが、消費へと不断に駆り立てられ、消耗品として扱われることの多い現代人にも当てはまる。マルセルはまた、「日課」をこなすことに忙しいフランス人の世界を批判的に観察しているが、この観察そのものも、課せられた役割を汲々としてこなすことを強い

られた日本人にも見事に該当すると言えよう。彼の批判は次のような言い方に端的に表現されている。「機能概念を軸とする世界は、実際に空虚であり、うつろな響きを持つているので、このような世界において行われる生活は絶望にさらされ、絶望に向かつて口をあけている。¹⁴」空虚な世界とは、存在論的なセンスを失い、自己の生に人間的な手ごたえを感じる余裕もなく、決められた役割と日課を果たすことに忙しい人間の状態を示している。マルセルの見方には、そのようにして生きることを強いられている人間への同情や共感はなく、外側からの傍観者の発言のきらいがあるものの、状況診断としては間違いないだろう。マルセルによれば、こうした世界には神秘に少しも場所を譲るまいとする意志がみなぎっている。¹⁵機能化され、日課を果たすことが重視される世界では、目の前にあるものへのかかわりのなかで生ずる問題はあふれていても、存在することの神秘に道が通じていることはないのである。問題は距離をとって外側から捉えられるものでしかなく、逆に神秘が、後に詳しく検討するように、「潜心」という、精神の働きを活発にするなかで垣間見られないとすれば、そうした働きが締め出された機能的な世界では、存在の神秘は占めるべき場所を持たない。マルセルはフロイトに抗して言う。「存在とは、経験の所与を対象として、これを次々と、内在的な価値あるいは有意義な価値が次第に失われる要素へと還元しようと試みる徹底的な分析に逆らうもの、あるいは、逆らうと思われるものである。」¹⁶すなわち、存在ある

いは存在すること、ある状況に巻きこまれて存在することは、自分の存在を脇において、自分に与えられるものを対象化する姿勢からは明らかにならないということである。

ここで、視点の転換が起こる。「存在とは何か」という対象化的問いから、その問いを問う私自身への問いかけという転換である。この転換はマルセル哲学の根幹に触れるものである。「存在について問うこの私は誰であるのか」という根本的な問いと並んで、「私にその問いを探究する資格があるのか」、「私は私自身の存在を確信できるのか」といった問いも発せられるが、こうした問いは、マルセル自身が述べているように、方法的懐疑の末に獲得されるデカルト的なコギトには結びつかない。周知のように、認識論的な地平でなされるデカルトの試みは、世界をおのれに対峙させる認識主観としてのコギトに到達する。しかし、特定の状況に巻きこまれて存在することがどういう事態であり、その問いを発する私がどういう方をしているかを探究するマルセルの試みは、デカルト的な主観には行き着かない。マルセルの関心は、コギトよりも、むしろそれを導き出すデカルト自身の存在、そしてそれと重ね合わせて自己の存在に向けられている。認識する私ではなく、私の具体的なあり方が問われるのである。

そのあり方を示す基本概念が、先に述べた「関与」である。関与とは、もう一度繰り返し返せば、私が私を取り巻くものに巻きこまれて、かかわりを持って生きていく状況を指し示してい

る。それは対象化できず、決して問題になりえない、超一問題 (meta-problematique) な次元、神秘的な次元である。「神秘的」とは、問題本来の所与に侵入し、侵略し、まさにそのことよって、それらの所与を単なる問題として超えていくような問題のことである。¹⁷⁾ 自己の外部に立って自己を対象化的に把握する自己の問題化によって、ある程度までの自己把握は可能であろう。しかし、その場合に、自己を対象化する私の存在そのものは対象化されてはいないのであり、いかにしても対象化されえない自己とその存在こそが問題の領域には入りこんでこない問題である。マルセルによれば、このかわりを生きたる自己にとつて、「私のなかにあるもの」と「私の前にしかないもの」との区別は消える。それというのも、かわりを生きたる状況においては、両者が私において入り混じり、私はもはや私の前に存在するものとの距離を保つことができず、「私のなかにあるもの」も「私の前にしかないもの」の影響を受けて変容し続けるからである。私は、対象との冷静な距離を保つ、不偏不党の主体ではなく、かわりにおいて生ずる出来事から促され、喜悅、動揺、感激、怒りといったさまざまな状態へと導かれる。

そうした状況の例として取り上げられるのが、私がかかわりを持つ悪や、愛などとならんで、出会い (rencontre) である。問われるのは、しばしば問題の次元にとどまるような事務的な出会い (交渉) ではなく、相互に影響を受けあう人格的な出会いである。前者は、相互に交わす言葉が手続きを先に進める目的

で使われ、目的が果たされれば、言葉は直ちに忘却される。しかし、後者においては、心をこめて発せられる言葉は、お互いのなかで響き、いつまでも記憶に残る。人格的な出会いは、相互に言葉を交わし、一人の時には不可能な、言葉で共にひとつの世界を織りあげる経験であり、相手の言葉によって自己の経験を組み替える創造的な経験でもある。この経験を生きる最中には、問題として目の前に繰り広げられるような対象的な出来事は出現しない。私は、こうした経験の外側にたつて、経験を他人事のように観察することはできない。私は、まさにマルセルが指摘するように、「出会いに引き入れられ、出会いに依存するのである」¹⁸⁾ 「私は出会いに包みこまれ、私の方が出会いを包みこんでしまうことはない」¹⁹⁾ こうした出会いにおいては、言葉を交わす相互の主体は、おたがいがどちらの方向に進むのかわからないままに、発せられる一語一語によって導かれる。話すのは相互の人間である。しかし、お互いの進む方向を決めるのは出会いという全体的な状況である。私が一方的に方向を決めることなどできない。人間はまた、状況を自分の都合で処理したり、意のままにしたりすることもできないのである。状況は、目の前に繰り広げられ、問題の対象として扱われる次元にはない。逆に人間を巻きこみ、包みこみ、人間の行方を左右するのが状況というものである。出会いという状況のなかでは、一定の予測は可能であるとしても、言葉のやりとりのなかで何が起こるかかわらないし、どのような事態が訪れるのかも定かではな

い。その意味で、マルセルは出会いにおいては、超—問題的で、神秘的な出来事が出現してくると見なしているのである。

III 神秘との遭遇—潜心の道—

超—問題的な出来事としての神秘に具体的にどう迫るのか、それがマルセイユ講演の主題である。マルセルによれば、既に述べたように、神秘は、問題と異なり眼前には展開されない。神秘は、私が巻きこまれている状況のなかで刻々と生じられるものであり、それを固定化して捉えることはできないのである。とすれば、神秘についてはどのような迫り方が考えられるのか。この問いに答えるためには、まずマルセル自身が、神秘をどのような仕方で経験しているのかを見なければならぬ。

マルセルにとって、神秘は、決して対象化できず、そのつど生じられているが、何がどのように生じられているのかをつまびらかにしえない性質のものである。しかし、それは確認されるものであり、決して打ち消すことのできないものである。超—問題的なものの存在様相こそが問われるべきであり、そこそが問題的ではないかと異議を唱える人を想定して、マルセルは次のように述べている。「超—問題的なものを思惟すること、より厳密に言えば、超—問題的なものを確認することは、それを、疑いの余地なく実在するもの、それを疑えばかならず矛盾におちいるようなものとして、肯定することである。」²⁰⁾ 言い換えれば、

超—問題的なものは、否定できないもの、疑いのないものとして自己に与えられているのである。マルセルによれば、超—問題的なもの、神秘へと向かうことは、対象化的経験からの実際の解放 (dégagement) であり、分離 (detachment) である。²¹⁾ 問題の次元で生じる経験から身を解き放ち、神秘という次元に移行することが求められている。

そのために必要な働きが、すでに言及した「潜心」である。潜心は、自己を内観の対象とすることではない。この場合は、自己を内観する主体と、内観される自己との間にある種の主客関係が生じる。この関係は、自己と自己との分離に基づく自己分裂的なものである。しかし、マルセルの言う潜心は、主体による自己客観的な直観ではなく、主体が自己の存在へと引きこもり、その状態のなかで自己に集中することである。引きこもりの状態と自己集中という行為の間に分離はない。両者は調和しているのである。それゆえに、潜心においては、主体と対象との間に可能な分離もなければ、主体と自己との間の分裂もない。岳野は、「マルセルのいわゆる潜心においては、主客の区別はなく、主が客であり客が主であるといった意識であって、これを自覚意識とよぶことができるであろう」と正鶴を射た見解を述べている。潜心は二分法的把握を超えて次元で成立するのである。²²⁾

マルセルにとって、潜心することのできる存在とは、自分がただ単に生存しているものではないことと、生に身をゆだねて

生に対してなんら影響力を持たない被造物ではないことを潜在的に示すことのできる存在に他ならない。²³ すなわち、われわれは、生きていくだけでなく、生の内側に潜って、そのことを内側から意識し、生きることに働きかけていくことができる存在だということである。マルセルによれば、働きかけることは、それを通じて、「われわれが統一態としての自分を取り戻す行為」²⁴である。裏返せば、働きかける以前には、われわれは統一態としての自分を生きてはいないということである。こうした考え方の背後には、既に述べたように、われわれは機能的な世界に生きるなかで、課せられた役割をこなし、対象のなかに自分を失って分裂した状態で生きていくというマルセルの診断が認められる。技術的なものが幅を利かせる世界で、技術に拘束されて生きる現代人の状態も、技術に自己と自己の生を絡めとられた深刻な状態と言えるだろう。この種の自己喪失と自己分散からの脱却の試みがマルセルの言う潜心である。それゆえ、潜心は単に内面を観る内観的な働きではない。「潜心は、おそらく、心のうちでもっとも見物的ではない働きだと言えるだろう。それは何かを見つめるのではなく、奪回 (reprise) であり、内的改造 (réfection intérieure) である。」²⁵ マルセルによれば、潜心は、観察における観察する私と観察される対象との間の隔たりを前提としない。それは自己を取り戻すことであり、自己をつくりかえることである。奪回とは、技術的なものなかへと分散した自己の外的関係を遮断し、自己の生の深部に潜む神秘的な出来

事を自己へと引き戻す試みである。

こうした積極的な言い方の内に、マルセルの神秘概念の展開と深まりを認めることができる。マルセルは、これまで述べてきたように、問題との対比で神秘に関する思索を始めたのであるが、潜心によって自己の生を内側から意識する働きを介して、この生が問題のように対象化できるものではないだけでなく、私はこの生の主体ではなく、生こそが私を支えているという根本的な事態が確認されるのである。私はこの生を自分で支配することも制限することもできない。生そのものの生成は自分でつくったものではない、与えられたものとして、既に、そして常に実現されている。マルセルによれば、自分の生に引きこもることによって、おそらく私の単なる生ではないものが取り戻される。生の奪回である。「潜心とは、それによって私が私に立ち戻っていかばいくほど、私自身のものであることをやめてしまうような、何よりも神秘的なパラドックスの現存に立ち会っているのである。」²⁶ すなわち、私が私の生の内へと潜っていくことによって、そこで見出されるのは私が私のものとすることができないような生の次元なのである。この次元に触れることによって、私は自分が生きていたのではなく、生かされて生きていたのだということに自覚することになる。自分の生の根柢が自分の内には見出せないのだという自覚である。この自覚は、パウロの「あなた方は、決してあなた方自身のものではない」という言葉と結びつけられている。カトリックに改宗して間もないマルセルに

よって、われわれの生が神に依存しているという事態が確認されていると見てよい。換言すれば、神の不断の働きかけによってのみわれわれは生きられるということである。われわれにおける自律性が否認されていると言ってもよいだろう。このことに関連して、『存在と所有』の最後ではこう述べられている。「自律的ではないという事態が、深く存在のなかに、言い換えれば、自我の手前（あるいは自我を超えたところ）に、持つということ一切を超越した地帯に根を下ろしている。私がこの地帯に到達するのは、瞑想（contemplation）のなかか、礼拝（adoration）のなかにおいてである。」²⁸ 瞑想、礼拝は潜心とほぼ同義で使われている。こうした自己の生のなかに入りこみ、自己の生の源泉へといたる働きによって、われわれが自律的に生きているのではなく、われわれを生かす存在によって生かされて生きていることの確認が得られるのである。マルセルによれば、自律的で能動的と見える活動の背後には、より根源的な中心的な活動性が見出されるのであり、その活動を通じて、われわれは自分を基礎づけている神秘の前に身を置くことになるのであり、その神秘の外ではわれわれは無に過ぎないのである。²⁹

マルセルは、最初は神秘を問題との関連で捉える哲学の立場から出発したが、後に、神秘を自律よりも他律を強調する宗教的な観点において把握しているのである。この意味で、マルセルの思索はキリスト教の枠内に制限されていくように見える。杉村は、マルセルの語る存在論的神秘にある種のドグマ的性格を

見て取り、「マルセルの思索は、キリスト教のドグマを前提にしてはいなくても、哲学的と問いの徹底性を殺ぐような仕方では宗教的なものを密輸入していると言わざるをえないであろう」と批判しているが、たしかに自己の信仰においてしか確認されえない神秘を他者に語っても独断のそしりは免れないかもしれない。しかし、宗教と結びついて現れるマルセルの思索は、キリスト教信仰のみならず、他の宗教にも等しく認められる類のものであり、その意味でキリスト教の外部へと開かれていることは否定できない。さらにまた、宗教によらずとも、思索を通じて存在の根底にわれわれの自律を支える地帯を見出すことは可能であろう。その場合には、神や仏、絶対者に代えて、自然やいのちといった言葉が選ばれるかもしれない。いずれにせよ、マルセルの思索が宗教の枠を超えて開かれていることも間違いない。存在の根拠を考える際に、マルセルが神秘について述べたことは多くの示唆を与えるのだ。

以上、マルセイユ講演前後のごく短い時期に限定して、マルセルの神秘に関する思索を組上にあげた。しかし、冒頭でも述べたように、「神秘」はマルセルが生涯取り組んだ課題のひとつであった。例えば一九四九年と五〇年の二度にわたって行われた講義でも、「神秘」は中心問題として幾度となく考察されていた。³⁰ その思索は、可視的な対象としては捉えることのできない実存の特徴を、神秘として定義される出来事の生起する点に認め

ている。この出来事は、課せられた役割をこなすことに忙しい人間や、技術的なものとの関係に拘束された人間には容易には気づかれない。対象的なもののみへと視野の限定された人間にも、この出来事は疎遠である。神秘は、具体的な状況のなかに在って、前後左右の環境や、自分以外の人間との交流などから不断の影響を受けながらも、その内実がしかと確かめられない出来事に驚き、その不可思議さに心打たれることがなければ決して意識されない。その意味で、神秘は、メルロー・ポンティが『知覚の現象学』の序文で述べたような、世界の神秘でも、理性の神秘でもない⁽²⁾。それは、何よりも自己の存在の神秘である。そして、その神秘は、自己の存在のありように魅了され、自己の存在のなかへと潜行することを止めない人間にひとつの決定的な事実を指し示す。それこそが、マルセルが潜心の道を通じて到達した「存在の神秘」である。それによって明らかにされるのは、生きてあることの根拠が私自身にはないという事態である。私は、生かされてあるからこそ、生きられるということである。自律は、それに先行する他律によってあらかじめ支えられているということでもある。

われわれの傲慢や思い上がりを戒めるこうした観点は、人間の自律や責任が強調される人間中心の世界では重視されることは少ない。経済優先の世俗的な世界では、まして顧みられることとはないだろう。しかし、そうした状況のなかで、見えるもの、感じられるものの背後に、それらを可能にしている神に源泉を

持つ「存在の神秘」を感受し、その次元へと開かれた状態において生きられるということは、まさにひとつの稀有な出来事とも言うべきではないだろうか。マルセルの思索は、何よりもその出来事へとわれわれを導こうとしている。

注

- (1) Cf. H. Spiegelberg, *The phenomenological Movement*, Kluwer Academic Publishers, 1964, p.448-469. スピーゲルバーグは「この著作でマルセルに多くのページを割いている。」
- (2) ヴァルデンフェルスは軽く触れる程度である。(ベルンハルト・ヴァルデンフェルス、佐藤真理人監訳『フランスの現象学』法政大学出版局、二〇〇九年、二二―二五頁参照。)次の書にもわずかだがマルセル哲学への言及が見られる。箱石匡行『フランス現象学の系譜』世界書院、一九九二年の第二部の第一章、第二章参照。
- (3) G. Marcel, *Être et Avoir 1 Journal métaphysique* (1928-1933), Editions Aubier-Montaigne, 1968, p.125. なお一九二七年に出版された『形而上学日記』については、ジャン・ヴァールを始めとする多くの研究書や論文が書かれている。Cf. Jean Wahl, *Vers le concret*, Librairie philosophique J. Vrin, 1932, p.223-269.
- (4) Cf. *ibid.*, p. 124.
- (5) *Ibid.*, p.127.
- (6) *Ibid.*, p.128.
- (7) 生成の最中で生じている「なんだか分からないもの」は「ほとんど無」ならんで、ジャンケレヴィッチの思索の根本問題のひとつであったが、「分からなさ」は「マルセルの言う神秘の言い換えと見ることも可能だろう」。Cf. *Le Je-ne-sais-quoi et le presque-rien*, Presse universitaire de France, 1957.
- (8) Cf. G. Marcel, *op. cit.*, p.146.

- (9) *Ibid.*, p.147.
 (10) *Ibid.*, p.147.
 (11) G.Marcel, *L'homme problematique*, Edition anterieure, 1995, p.193.
 (12) *Ibid.*, p.193.
 (13) Cf.G. Marcel, *Entretiens Paul Ricœur-Gabriel Marcel*, Edition anterieure, 1998, p.36f.
 (14) G.Marcel, *L'homme problematique*, p.196.
 (15) *Ibid.*, p.196.
 (16) *Ibid.*, p.199.
 (17) *Ibid.*, p.205.
 (18) *Ibid.*, p.209.
 (19) *Ibid.*, p.209.
 (20) *Ibid.*, p.210.
 (21) Cf. *ibid.*, p.211.
 (22) 『岳野慶作著作集 IV』中央出版社、一九七四年、一一八～一二九頁参照。同じ箇所へ、岳野はまた、マルセルの潜在を、西田幾多郎の「意識される意識」と「意識する意識」という区別と関連づけながら、「意識を對象化して与えられることではなく、意識自体が自己を自覚する」といっている。
 (23) G.Marcel, *L'homme problematique*, p.211.
 (24) *Ibid.*, p.211.
 (25) *Ibid.*, p.212f.
 (26) *Ibid.*, p.213.
 (27) *Ibid.*, p.213.
 (28) G.Marcel, *Être et Avoir 1 Journal métaphysique (1928-1933)*, p.219.
 (29) *Ibid.*, p.220.
 (30) 杉村靖彦「マルセル」『哲学の歴史 12』中央公論新社、二〇〇八年、一九〇頁。
 (31) Cf. Gabriel Marcel, *Le mystère de l'être*, Association Présence de

Gabriel Marcel, 1997, の講義の第一部の第七講「状況内存在」では、とりわけ神秘への道に続く潜在の働きが強調されている。
 (32) Cf. M. Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, Editions Gallimard, 1945, p.xvii.

(二〇一〇年一月二十五日)